佐竹雅昭

さたけ・まさあき

今さらの説明を要しない格闘家・佐竹雅昭。K-1の創設者に名を連ね、自ら選手としてタイトルも獲った。そして昨年大晦日、リングでの修行を終えた格闘家が、京都で新たな「道」を見出した。

The Real Face

映画好きのませガキ 人と同じことが大嫌い

家庭環境が特別だったわけではない。ただ大阪は吹田市に生まれた雅昭少年は、少し早熟で、人と違うことをしたがった。『がんばれ！ベアーズ』という映画を観て、アマンダ役のテイタム・オニールと結婚したいと思ったのが小学6年生（笑）。『ロードショー』とか『スクリーン』を読んでたり、映画を観に梅田をウロウロしていたり。ウルトラマンや仮面ライダーというヒーローものも全盛だったし、本格的に格闘技に興味を

佐竹雅昭（さたけ・まさあき）

'65年生まれ。大阪府吹田市出身。'93年「K-1」設立。'94年K-1グランプリ準優勝。'97～'98年K-1 JAPAN連覇。他、ISKA世界ヘビー級王者、全日本空手道選手権6回優勝（3連覇を含む）など、タイトル多数。'02年「リング上の修行を終了した」として、'03年9月、「総合打撃道 佐竹道場」を京都市下京区に創設。「総長自らが体の続く限り直接指導します！」の公約の下、後進に「道」の指導を行っている。

information

プライベートクラスも含む、佐竹氏があらゆる格闘技を経験した先に見出した「道」の体現の場は下記。ホビーの蒐集家であったり、冗談好きであったり、道に捧する氏の人柄を確認できるのも、練習生の特権と言えるだろう。

「総合打撃道 佐竹道場」
京都市下京区魚屋町通四条下ル
八文字町341
☎075・361・1199
平日14:00～22:00　土12:00～18:00
http://www.dagekido.com

持ったのは『リングにかけろ』、と言うマンガを読んでからかな。必殺技を見て『人と違うことをしてるなぁ』と（笑）。ハリウッドとヒーロー。この二つは、長く彼の人生の転機に、関わっていく。

「中学時代に読んだ空手の本にね、牛を殺したとか、虎を殺したとか描いてあるわけですよ。『これは実在するヒーローだ』と思ったんだね。サッカー部や野球部ではヒーローになれるとは思わなかったし、ハリウッドに行けるとも思わなかったな（笑）。そして雅昭少年は近くの公園の木を蹴り始める。もちろん独学。単に突いたり蹴ったり。教則ビデオもない。痛かったが「この痛さがあって強さが手に入るんだ、と思ってた。何かがパチッとはまったんだね」。

高校進学をせず山籠もりを考えたぐらい本気だった中学時代。「道場に行かせてやるから進学しろ」という妙な約束のもと受験勉強を始め、高校2年生で正道会館に入門。高卒後こそ、就職して空手を本格的にやろうと思った。ところが「道場の先輩に『進学できる時はしておいた方がいい。時間をお金で買いに行った方がイイで』って言われてね。そこでまたハリウッドの話が出てくる訳ですよ（笑）。関西外国語大学外国語学部英米語学科に入学…。

わずか8カ月ほどの道場通いだったが人に見えない努力を重ね、大学入学後は飛び級を繰り返し、すぐに黒帯を手にした。1回生で全国大会4位、2～3回生では2位、最終学年で遂に優勝を獲り、「優勝を経験したし、空手を離れてキチンと就職しようと思った」。折しもバブルは最盛期。テレビ局を含めて魅力的な内定が揃った。華やかな世界への入り口、その先には今度こそハリウッドがあると思っていた。

そして最後に出場した試合。優勝賞金は100万円。「絶対勝てる大会だった。でも油断したんですね。負けてしまったんですよ。負けたまま油断したまま社会人にはなりたくない、と。鍛え直しやな、と思ってね」。デスクまで用意されていた内定を蹴った。

「道」を自ら壊し、再生する壮大な「行って来い」

結局、正道会館の職員に就職。初仕給は5万円だった。「どうやって暮らそうかな、と。パチプロしてましたね（笑）」。空手で生計を立てられるようにならなきゃいけない。ここからが彼のライフワークだ。アマチュア世界の空手では、ファイトマネーもなく、トーナメントに優勝して賞金を手にするしかない。もっと食って行けるようにならなければいけない。それが「K－1」を立ち上げるキッカケとなった。「実質的には、石井和義（正道会館館長）と僕の二人でね。空手の認知度、地位向上のための特攻隊長ですよね。角ちゃん（角田信朗・現正道会館師範）はそのころはまだ違う仕事してたからね」。

武術・剣術・柔術…。「術」の字は実戦を前提にある。本気で殴り合い、殺し合う為に生まれた技だ。太平の世になり、肉体の鍛錬と共に「精神鍛錬」「礼儀作法」といったメンタルな要素を残してそれは「道」になった。すなわち武道・剣道・柔道…である。だから本来、武道とは商売とはかけ離れたところにあるべき存在だ。それを知りつつ「一度それを壊さなければならなかった。礼儀もヘッタクレもない。ただ強い者が一番だ、という価値観を貫く必要があった」。ある意味、本来の武道からすれば「犠牲」の上にK－1の成功はあった。

格闘家としての、その濃密な数年間。頭蓋骨陥没を経験し、ICUの世話にも何度もなった。「人間の死は当たり前だと思うようになった。生きてる方が不思議なんだな、と。もう38歳。そんなに寿命は長くないと思ってるんですよ。あと何年生きれるんだろう？と思ってね」。「リング上の修行は終わった」と彼は決断した。時を同じくして、父、そして友人の死…。数カ月で、何人もの死を経験した。

『徳川家康・豊臣秀吉…、皆今でも語り継がれている。自分の死と存在を考えたときに、これが不老不死ということじゃないかな、と。それが僕にとっての仮面ライダーやウルトラマンかな、と。最後もやっぱりそこに繋がるんです。最近その答えが出た。死にたくないけど死ぬのは当たり前。だから人の心に名前を残したい」。

空手・キックボクシング・ボクシング・拳法・レスリング・柔術・パーリトゥード、プロレスまで全てやった。この経験を、今からは道として人に伝えていきたい。「経験した人間には、誰も文句は言えないはずなんです。汚いものも見てきた。それは反面教師としておいといて、ちゃんと良いものをチョイスして、これからは『道』を伝えたいんです。空手をプロにした。K－1も作った。僕は常に人の前を行く人間でありたいんです。誰もやってないことをしたいのも子供の頃から変わらない。いろんな格闘技を経験した上で僕にしかできない新しい道。それが『総合打撃道』なんですね」。

自分で壊した術の部分を、改めて道に戻す。壮大な「行って来い」である。

墓までの残りの人生は体の続く限り「道」を説く

佐竹家の墓は、京都にある。祖父は京都で料理に関わる仕事をしていたという。父の死を看取り、代々の墓前でこう思った。「オレはここに眠ることになるんだな」。「考えたら、街もある、静謐な場所もある。四季もはっきりしてる。人間として、すごく暮らしやすい所じゃないか？と。日本人として修行をするには良いところではないかな、と」。「総合打撃道 佐竹道場」を京都に興す事になった理由である。「東京に道場を作る話ももちろんあった。生徒も多いし、儲かりますよ。でも心の部分で何か引っかかった。そもそも今まで金のために戦った訳ではないから。強かったから勝てた。勝てたから金が入ってきただけで。だから、金を追いかけたら金は逃げていく、ということは知ってるわけです。それよりも死ぬことから逆算した人生の中で、京都がフィットした。大好きだったお爺ちゃんの思い出もラップした。素直になれる場所なんだよね。『自分をさらけ出せる自信』を持てる所だったんだ」。

至極名言である。自分を飾らずにいることは、何よりも心地よいし大切なことだ。だがその為には飾らずにいられるだけの根拠、つまり自信が必要なのだ。それが「道」である。

これから、指導者としてその「道」を説いてゆく為に立つ道場というリング。その上は一対一ではない。何十人という練習生を相手に、しかもバラバラの指導を要する。それは一対多の試合を、しかもそれぞれ違う技で組み手していくようなものだ。強くなりたい人。精神鍛錬をしたい人。美容の為、健康の為…。それぞれに的確な指導をすること。それが新たな戦いだ。

これまで戦ってきたリングは、せいぜい数メートル四方。だが、これから築いていく道は、広い広い幅を持ち、遠く遠く続く。

残念ながらまだテイタム・オニールに会う夢は叶っていない。だが、インタビュー中鳴った佐竹氏の携帯電話の着メロ・仮面ライダーのテーマは、彼のテーマ曲『闘志天翔』に負けぬほど、彼に似合っていた。